

園芸タイムリー情報 《6月中・下旬版》

令和4年6月20日発行 第3号

【上川農業改良普及センター】

Tel 0166-84-2017 Fax 0166-84-2009

E-mail : asahi-nokai.11@pref.hokkaido.lg.jp

HomePage

<https://www.kamikawa.pref.hokkaido.lg.jp/ss/nkc/index.html>

全作物共通

天気は数日の周期で変わり、平均気温は平年並か高め、降水量・日照時間はほぼ平年並の見込みです。

- ①ハウス栽培は、気温の変動や生育ステージに応じた温度管理、水管理を徹底しましょう。
- ②露地野菜のセル成形苗利用では、老化苗とならないよう、養水分管理に注意しましょう。活着を揃えるため、ほ場の碎土・整地は、土壌が適湿な時に行い、根鉢が露出しない深さで植えるようにしましょう。
- ③ほ場周辺の雑草除去などのほ場衛生管理を徹底し、ハダニ、アブラムシ類、アザミウマ類等の飛び込み防止に努めましょう。

※農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用ください。


- ◆農薬の使用に当たっては、使用基準を必ず守りましょう。
なお、品目ごとの栽培防除体系を基に減農薬でクリーンな野菜生産を実践しましょう。
- ◆育苗ハウス内で農薬をペーパーポットやセルトレイにかん注処理または、粉剤や粒剤を処理した場合は、後作物の栽培を避けましょう。
- ◆防虫ネット・近紫外線カットフィルム・粘着シートなどを活用し、適切な栽培管理と合わせ、病害虫の発生を最小限に抑制しましょう。

※この情報は、上川農業改良普及センター本所地域(旭川市、鷹栖町、当麻町、比布町、愛別町、上川町)向けに作成されています。
気象・土壌条件・作業体系から当地域以外には、適用されませんので十分ご注意ください。
(不利益・損害などが発生した場合、当方は責任を負うことはできません)
※掲載されている農薬情報は、令和4年6月8日現在の登録内容となっていますので、活用の際は、あらかじめ安全使用基準を確認くださいますようお願いいたします。

■□■□■□■□■□ GAP手法の活用 □■□■□■□■□■
【農作業安全編】
—農作業を安全に行うために 安全確保—

気温が上昇するこれからの時期は、熱中症予防に十分留意しましょう。

- 農業機械の公道走行は、灯火器類の取付など法令を遵守し、走行に必要な運転免許証等を携帯し、運転マナーを守り安全運転に努めましょう。車体の幅、高さを確認し、路肩や電線に注意しましょう。
- 作業前には、作業機械の点検・整備を入念に行います。安全カバーなどの安全装備についても点検を行い、破損などが見られた場合には、補修を行いましょう。
- 作業の指示を行う場合には、指示者は作業者に対して、危険箇所や注意事項等を事前に説明し、事故防止に努めましょう。

作物名	ピーマン・ししとう・なんばん		
病害虫 生理障害名			
ハダニ類			
発生状況			
少発生			
発生時期			
6月上旬～			

葉表の黄化症状

葉裏の黄化と褐変

発生の状況・要因

- ・6月上旬に一部ほ場で発生が見られた。
- ・高温乾燥時には、多発する可能性が高いため注意が必要である。
- ・葉表の黄変と葉裏の褐変症状が見られ、加害部位には微少なダニが見られる。
- ・密度が増加してくると細かな糸で巣を作り、薬剤が直接かかりづらくなるため防除が困難となる。

対策

- ・抵抗性が発達しやすいので各薬剤は年1回のみでの使用が望ましい。
- ・天敵（スパイカルプラス）を導入していても発生が目立つ場合には天敵に影響の少ない剤で一度防除を実施する。

＜防除の一例＞

カブリダニ類導入時に使用可能（なんばんは登録なし）

●ニッソラン水和剤				
ピーマン	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内	
ししとう	3,000倍	収穫前日まで	2回以内	
●スターマイトフロアブル				
ピーマン、ししとう	2,000倍	収穫前日まで	1回	
カブリダニ類導入時には使用不可（3品目共通）				
●コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

トマト・ミニトマト

病虫害
生理障害名

灰色かび病

発生状況

少発生

発生時期

6月上旬



がくから感染した
発病果実



葉の病斑とかび

発生の状況・要因

- ・ 6月上旬より果実での発生を確認しており、今後も注意が必要である。
- ・ 気温20℃前後で高湿度条件が長く続くと発生しやすい。
- ・ 枯れた茎葉、摘芽の傷口、果実のがくから伝染しやすい。

対策

- ・ 換気に注意し、除湿を図る。
- ・ 枯れた葉や脇芽の除去は、なるべく晴天時に行う。
- ・ 罹病した果実や葉はこまめに取り除き、ほ場外で処分する。

＜防除の一例＞

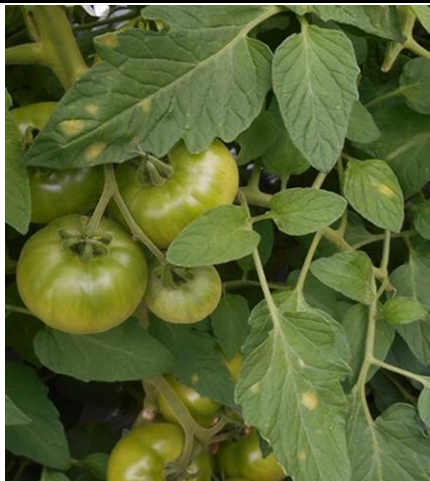

予防散布で効果の期待できる剤

- ダコニール1000 1,000倍 収穫前日まで
トマト（直径3cm以下を除く）：4回以内
ミニトマト：2回以内

発生が見られた際に使用する剤

- ファンタジスタ顆粒水和剤
2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、
倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	トマト・中玉トマト・ミニトマト	
病害虫生理障害名		
葉かび病 すすかび病		
発生状況		
少発生		
発生時期		
6月中旬～	葉表の病斑（葉かび病）	葉裏のカビ 上：葉かび病 下：すすかび病

発生の状況・要因

- ミニトマトで葉かび病の発生が見られた。
- 両病害ともよく似た病斑を形成し、葉裏にかびが見られる。
- 葉かび病は20～25℃、すすかび病は26～28℃で発生しやすく、共に多湿条件で発生が多くなる。

対 策

- ハウスの換気に努め、下葉等の摘葉による通気性の確保を行う。
- 葉かび病は草勢が低下すると発生が増加するのでかん水不足や追肥遅れにならないように気をつける。
- 発生蔓延後の防除は困難なので、予防効果の高いダコニール1000、ベルコートフロアブル、微生物農薬等による予防的防除に努める。
- 発生が増加する場合は、被害葉の除去と下記の治療効果のある薬剤で防除を行う。

＜発生確認後の防除の一例＞（トマト・中玉・ミニトマト共通）

- トリフミン水和剤

葉かび病：3,000～5,000倍	収穫前日まで	5回以内
すすかび病：3,000倍	収穫前日まで	5回以内
- シグナムWDG 2,000倍

収穫前日まで	2回以内
--------	------

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

メロン・きゅうり

病虫害
 生理障害名

うどんこ病

発生状況

少発生

発生時期

6月中旬～



きゅうりの葉表に発生した白いかび

発生の状況・要因

- ・葉や茎の表面にうどん粉をふりかけたような白斑を生じ、多発生の時は果柄やへたなどにも発生し、商品価値が低下する。
- ・例年、生育後半に発生が多くなるが、乾燥条件により発生が早まる場合もある。
- ・過繁茂になると発生しやすい。

対策

- ・ほ場を乾燥させすぎない。
- ・初発を確認したら薬剤散布を実施する。
- ・被害葉や果実は摘除し、残さは適切にほ場外へ搬出する。

<防除の一例>

●フルピカフロアブル

メロン・きゅうり：2,000～3,000倍 収穫前日まで 4回以内

●ストロビーフロアブル

きゅうり： 3,000倍 収穫前日まで 3回以内

メロン： 2,000～3,000倍 収穫前日まで 3回以内

※ストロビーフロアブルへの浸透性展着剤の加用は薬害を生じる恐れがあるので避ける。

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。



作物名	きゅうり	
病害虫 生理障害名		
アザミウマ類		
発生状況		
微発生		
発生時期		
6月中旬～	写真: 果実肩部分へのかすり状食害	

写真:
花への寄生

発生の状況・要因

- 花や葉に寄生する。
- 果実の肩部分にかすり状の食害痕が発生し、商品価値が低下する。
- 通常、大きな問題にはならないが、高温が続くなどして、アザミウマ類の発生量が多くなると、被害の発生が見られる。

対 策

- ほ場周辺の除草に努める。
- アザミウマ類は花の中にいるので、花の中をよく観察する。また、葉に寄生している場合は、葉にかすり状の食害痕が見られるので、ほ場をよく観察し、発生の増加が見られたら、農薬による防除を行う。

＜防除の一例＞

●ハチハチ乳剤	1,000～2,000倍	収穫前日まで	2回以内
●モスピラン顆粒水溶剤	2,000～4,000倍	収穫前日まで	3回以内
●ベネビアOD	2,000倍	収穫前日まで	3回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

すいか・メロン・きゅうり

病虫害
 生理障害名

アブラムシ類

発生状況

発生に注意

発生時期

—



すいかに発生したアブラムシ(左)と被害葉(右)

発生の状況・要因

- 葉の裏に群生し、吸汁害による茎葉の萎凋、排泄物による葉や果実の汚れが発生する。
- ハウス内は温度が高く、露地よりも増殖が早いので注意する。

対策

- ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。
- 薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。
- ミツバチを放飼しているほ場では、薬剤散布を控える。

〈防除の一例〉

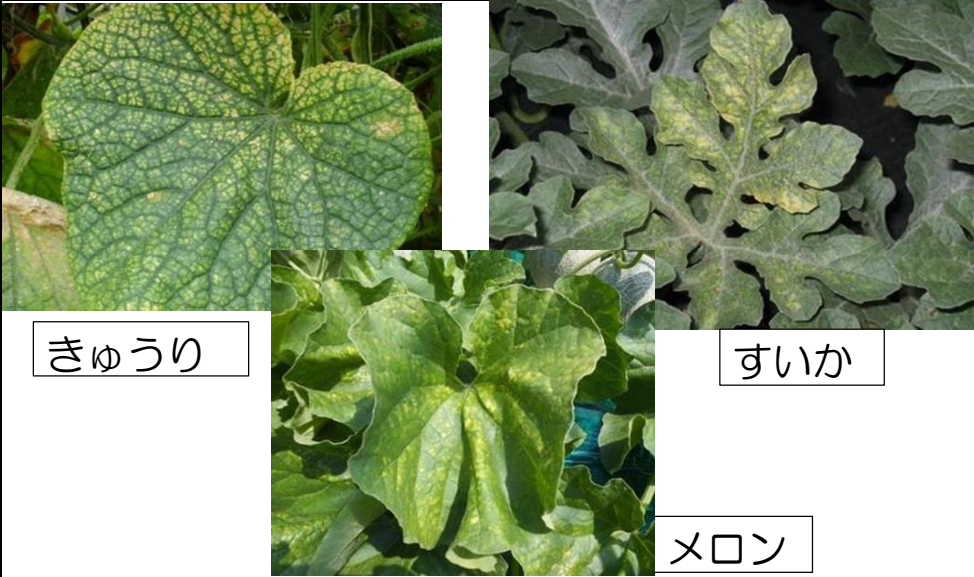
● チェス顆粒水和剤

きゅうり	5,000倍	収穫前日まで	3回以内
すいか・メロン	5,000倍	収穫3日前まで	4回以内

● モスピラン顆粒水溶剤

きゅうり	2,000~4,000倍	収穫前日まで	3回以内
すいか	2,000~4,000倍	収穫3日前まで	3回以内
メロン	8,000倍	収穫3日前まで	3回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	すいか・メロン・きゅうり				
病虫害 生理障害名					
ハダニ類					
発生状況					
少発生				きゅうり	すいか
発生時期				メロン	
6月上旬					

発生の状況・要因

- ・葉の裏に寄生し、吸汁により葉の表に白いかすり状の斑点が現れる。発生密度が高くなると葉全体が黄変枯死する。
- ・高温乾燥を好むため、ハウスでは露地よりも早く発生する。

対 策

- ・ほ場をよく観察し、発生初期の低密度のうちに防除する。
- ・ハウスでは、侵入しやすい出入り口やサイドなどの開口部付近を中心に、よく観察する。
- ・薬剤抵抗性の出現を防止するため、同一薬剤は連用しない。

<防除の一例>

●コロマイト乳剤

きゅうり	1,000～1,500倍	収穫前日まで	2回以内
すいか	1,000倍	収穫7日前まで	2回以内
メロン	1,000倍	収穫前日まで	2回以内

●ニッソラン水和剤

きゅうり	2,000～3,000倍	収穫前日まで	2回以内
すいか	2,000倍	収穫前日まで	2回以内
メロン	2,000倍	収穫3日前まで	2回以内

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

あぶらな科野菜全般

病虫害
 生理障害名



キスジノミハムシ

発生状況

少発生

発生時期

5月下旬～

キスジノミハムシ成虫

こまつな葉部食害

発生の状況・要因

- 成虫は葉、幼虫は根の表皮を食害する。
- 気温の上昇に伴い、5月下旬から成虫の発生が見られる。
- 6月も引き続き発生に注意する。

- 成虫期間：1～4ヵ月
- 卵期間：5～7日
- 幼虫期間：10～20日
- 蛹期間：3～15日

対策

- 成虫の多発時は防除効果が劣るため、ほ場をよく観察し、発生初期防除に努める。
- 土壌施用粒剤は、土壌水分が極端に低下すると効果が劣るため、かん水管理に留意する。
- ハウス内外の雑草や作物残さを適切に処分し、発生密度を高めないようにする。

<防除の一例>

こまつな（非結球あぶらな科葉菜類）

- フォース粒剤 4kg/10a は種時全面土壌混和 1回

チンゲンサイ

- スタークル粒剤 6kg/10a 定植時土壌混和 1回

ハゲサイ・ターサイ・みずな・こまつな（非結球あぶらな科葉菜類）

- モスピラン顆粒水溶剤 4,000倍 収穫7日前まで 1回

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

あぶらな科野菜全般

病虫害
生理障害名

コナガ成虫

コナガ

発生状況

少～中発生

発生時期

5月下旬～



コナガ幼虫



幼虫による葉の被害

発生の状況・要因

- 幼虫が葉裏に潜み、葉の表皮を残して食害する。
- 比布町では4月11日（平年比7日早）に成虫の初発が確認された。
- 5月下旬より、幼虫の初発を確認しており、今後も幼虫の発生に注意が必要である。

対策

- ほ場の観察に努め、初発を逃さないよう防除を開始する。
- 防虫ネット（目合い1.0mm）を、侵入口となる隙間を作らないように設置する。
- 品目により薬剤の登録内容が違うので、ラベルを確認してから使用する。
- ジアミド剤の防除効果の低下事例が確認されているため、複数系統の薬剤を用いたローテーション防除を実施する。

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名

しゅんぎく

病虫害
生理障害名

雌成虫の被害痕



幼虫による葉裏の食害



ハモグリバエ類

発生状況

少発生

発生時期

6月上旬～

成虫



発生の状況・要因

- ・発生初期には、雌成虫が産卵管で葉に傷をつけ、液汁を舐めたり、産卵するので、表面に白い小斑点状の加害痕が見られる。
- ・幼虫は葉肉内を蛇行して食害する。老熟した幼虫は潜孔内で蛹化する。



対策

- ・苗への寄生と、定植ほ場への持ち込みに注意する。
- ・幼虫多発後から防除を開始すると効果が得られにくい。成虫や幼虫の被害痕を見落とさないよう観察し、速やかに薬剤防除を行う。

＜防除の一例＞

- アファーム乳剤 2,000倍 収穫7日前まで 2回以内
- エビセクト水和剤 2,000倍 収穫14日前まで 2回以内
- ※エビセクト水和剤はマメハモグリバエで登録あり

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。

作物名	あぶらな科野菜など葉菜類全般	
病虫害 生理障害名	ウスカワマイマイ	
ナメクジ類 カタツムリ類	 	
発生状況		
少発生		
発生時期		
5月中旬～	チャコウラナメクジ	

発生の状況・要因

- ナメクジ・カタツムリは、ほ場周辺の雑草地、石の下、日陰など暗くて湿気が多い場所を好み、地中で越冬する。
- 葉の食害の他、這った痕の粘液の汚れ、本体やフンの混入が問題となっている。
- 雨天時や夜間は活発に活動する。
- 5月中旬以降カタツムリ類の発生を確認しているため、今後も注意が必要である。

対 策

- 常発ほ場では通気を良くして湿気を放出する。
- スラゴを使用する場合は作物周辺あるいは株元の土壌表面に散布し、作物に付着しないように気をつける。

＜防除の一例＞

●スラゴ 1～5g/m² (3.3～16.5g/坪) 発生時

※本資料に記載の農薬や資材は「地域で推奨するもの」を使用し、倍率や収穫前日数に十分留意して使用してください。